

心理学講座より

「心理学講座」第5回配本附録

東京都神田局区内神保町2の24 電車通り

株式会社 中山書店

性格心理学と

学习心理学の握手

児玉省

で聞きされたようであった。筆者自身も、その後この問題を忘れてしまっていた。ところが最近その論文を取り出して、しげしげと見直したものである。

過去十年なり二十年の心理学の動きを顧みると、心理学が過去三十年くらいの間に行った一大旋回をまさまさと見せつけられる気がする。筆者は心理学の一大旋回、または心理学の発達上の一動向について、筆者自身が、身をもって感じさせられている事実を、ここで述べてみようと思う。例を自分自身にとることは多少気がひけるが、筆者はかつて日本心理学会二回大会に「連想の生理的基礎」という発表を行ったことがある。それは筆者がシカゴ大学大院で勉強中に、当時エール大学から客員教授としていたエンジヤ教授(Engel)について、生理心理学を習い、シリントン、ルーカス、エドリアン、ヘンドを勉強しているうちに、自分がでつあげた一つの仮設的な考え方であつた。エンジヤ先生に見てもらつたら、問題はあるが面白いといってくれたものである。今からみると勿論冷汗的なものである。それを日本の学会で読んだものである。一、二人の注意を惹いたが、一般には見向きもされない

な考え方があつた。いまや心理学界に脚光を浴びて登場しているからである。筆者がシリントンやルーカスなどから借りて使つた extinction とか inhibition とか refractory など、一連の言葉はいま、学習心理の論文や書物には、いたるところに使われているのである。筆者はいま学生諸氏と一緒に N. E. Miller の Learnable Drives and Rewards をよんでいるが、この一文は始めから終りまで、こんな言葉がつづいている。しかも、ミラーは、専門はむしろ臨床心理学の人なのである。そのほか、Personality and Psychotherapy のミラーとの共同著者であるダラーレー、それからマウワーなどについても同様である。精神異常的な行動が、学習せられるといふことは、容易に誰でも考えられることであるが、その学習形態を、ネズミを使って、恐怖とか、inhibition などの面を、いわゆる実験心理学的に研究し始めようとは、三十年前の筆者はうがつにも考えたことがなかつた。そのため、筆者は折角、

當時の動物心理学の一流の学者であつた力博士から、ネズミの実験のことを教わつておきながら、動物実験も、コンディショニングの考え方なども放棄してしまつてゐたのである。もし学界発表当时から引きついで、あの頃の考え方を発展させていたならば、小保内教授の感應理論や相良教授のゲシュタルト理論の向うをはって、今頃は、臨床心理をネズミに結びつけて、一言やつていたらうにと思うと残念である。

現在のビーベアリズムには、腹の中で遠慮しつつものをいついていた当時に比べて、あらゆる学習の基本理論は、こちらでこなしてみせるという意気込みがみられる。前述のミラー、ダラード、マワリーなどが、いずれもネズミを使って、臨床心理学の基本的問題に取りくんでいる有様である。

心理学への要望は、下積みの状態に放置せられていたものである。それがいまや、この心理学の両分野は、学界の第一線的研究分野となつて、脚光を浴びて登場しているのである。その有様は久しく人間が追求していた、人間探求がようやくそのテクニックを発見したかのよう、気持の表現のようである。それは、人間を分析することによつて理解しようとした分析的原子主義に対する反撥でもあつたろうが、同時に再度の世界大戦がもたらした精神病異常者の増加が解決を要求した結果でもある。

それで、臨床心理学や性格心理学の研究方法を一べつすると、筆者は本文の冒頭で述べたと同じことを、ここでもまた見出すのである。もちろん性格心理学や臨床心理学には、それに独特な研究の角度と方法がある。しかし、同時に、性格の形成や異常行動の形成が、学習の過程を通じて成立していくことも明らかである。ここに人間全体の探求としての性格心理学や臨床心理学が、その基本的な一角でネズミに結びついていくことになつたのである。知覚も、もちろん性格の表現である。ここに、ブレーグやラムゼイのような知覚の窓からは性格

を検討しようと試みがあらわれるのも当然である。またハーヴィードの心理学教室出身の俊秀ボストマンやブルンナが、性格心理学に興味を持ちながら、知覚や、学習理論を取りあげているのも同じような現象である。

結局過去三十年の心理学を顧みて思うことは、三十年前に、知覚や記憶、学習などを個々べつべつに研究せられていて、それと性格との結びつきについて無関心であったようなそれらの心理学は、今やいちじるしく、性格との関連において、または性格の一つの基礎として、検討せられるにいたたどり、または兩者が歩みよつて手をつなぎうるだけに、心理学が進歩したといふことができる。筆者はこれをもつて、現在の心理学の最も大きい特徴の一つと考えるものである。もちろん何れの部門も、おのれのその独自の面を持ち合していることはいうまでもない。また現代心理学の特徴として、前述以外の多くの点があることもいうまでもないが、それらの点については、ここで述べることができない。

Gerontology

礼 講 檻

勝
Paediatrics から Paediology

「人の困ったなことやおどきだ」と

「自分の困ったなことを繰り返して

おだれ」など、一体何が心理學的に

マタ一だらうか? などを考へながら、

やはり自分の意地悪をだらうことにした。

わたくしが Gerontology (ゼロントロ

ジー) といえば、世間は「またが、しゃる

い」というにあはりでいる。流行を追えよ

「あいつまでが」といわれる。世間はいつ

やあは「またが」といわれる。世間はいつ

やあは「またが」といわれる。世間はいつ

京都の佐藤君が今春の日本心臓学会の大會の総会をやつて、アメリカの心臓学会大會との比較を試みたその演説

肌をつかまえたわけではないが、わたくし

なりに老人研究のことをやはり喋りたくな

た。

老人研究も Geriatrics も、Gerontology (統合されたもの) である。老人病の重心として老生体を臨床的に研究しようとした Geriatrics が、社会的乃至は文化的適応の問題として老人をとりあつかお

る。Gerontology の展開には、やがて発刊され

に、アメリカの學界は、異常な興奮状態を呈している。とにかく老

年期の総合的研究として Gerontology が登場して大向うの賑采

を博しているわけだ。そのむか

し、精神的な老度をはかつてみては

どうか。(問題毎にハイ、イイエ、ワカラ

ヌと段階をもうけて、探点は御自由)

「近頃の出来事に対するおぼえが悪い

」はよく仕事をしようとするトライ

トしてくる

三、非常に自己中心的だ

四、過去のことについてお喋り

五、愚痴っぽい

六、自分の面前でいわれたこと、またな

されたことに余り注意しない、

七、他人にわざわざされたくない、独り

でいたい。

八、新しい仕方をなるうことがむずかし

九、異常な體々しきにイライラしていく

10、他人と一緒にいることが億劫だ、や

まいが悪い

11、社会の変化に對して疑い深くなる

12、自分自分の感じに拘泥しやすい

13、過去について、特に苦労してきたり

14、とついてお喋り

15、考へ(計画)を変えることがむずか

しい。

16、はぎれとかつまらぬ物をあつめら

〈大阪大学教授・文学博士〉

心理学者といふ名の人名

青木孝賴

立っている人が数人程度の電車の中へ、ア・ラ・モードの装いがこれ見よがしに乗り込んでくると、乗客の視線が一齊にその方へ引きつけられるといった状況の中で、たった一人だけ皆の視線とは逆に、乗客一人一人の表情を観察はじめめる者がいたら、心理学者と思つて間違いない。心理学者と

防ぐために、心理学をいくらか強してみても、人間の心理がすぐ
に判るものではない。數十年もの間、心理学を研究されてきた博士や大学教授がその
証拠で、と告げてはおく次第だ。だが、心理学への期待・憧憬は一昔、二昔前のこと
学に対するそれのように強く烈しいものが
ある。

「この代議士の I・Q・は」と評価し、諷刺劇の鏡像にまじって「笑う阿呆と笑わぬ阿呆」のペーセンテージを調査する。こうした悪趣味の持ち主であるとの偏見に加えて、世間の人々は心理学者と同席すると「なんだか恐ろしい!」。よくいわれたものだ「自分の心理がすっかり見つかされるようで」というのがその理由らしい。わゆる読心術を会得した、ないしは修業中の人物との誤解である。それでいて爪弾きのない点が意味深長である。

田ぐ、「心理学的教養ある社員を求む」
田ぐ、「心理学的教養豊かな養子を望む」
田ぐ、「心理学的教養を具えた政治家を
議会へ送れ」

法医学界の最高権威である古畑博士が
犯罪心理学に深い関連をもつ斯学を、
味深く、且つ平明に解説された案内書。

〔新刊〕法医学入门 A 5 判箱入上制
插图三三葉二六〇圖
第五章

生理学概論

大學生に、心理学受講の動機を調査してみると（一般教養科目としての場合）つねに「自己や他人の心理が判るようになりたいから」と答える者が圧倒的である。彼らの徒らな失望を前もって防ぐために、「心理学をいくら勉強しても、人間の心理がすぐ

議題にのぼったとしても大いに祝うべき
ない」との理由で、心理学の改名が学会全般
とと言わなければならないであろう。
ただ、せめて各人の自負する心理学的教
義を更に飾るためにその言葉の頭に、ドク
ターフ・アメリカ的またはソヴィエット的お
どと附加加えなさいことを望みたいものであ
る。(東京教育大学教育相談部)

読者のページ

新しい資料を駆使して、心理学の全分野にわたって基礎知識、テクニックを具体的に述べてある本講座は、わが国の心理学を進展するにあずかって力あると信じています。一流専門家の執筆による、現在心理学研究の最も新しい発表を知ることは、私の期待をこえたものでした。

山口県厚狭町 内藤 是昌

カウゼリングのように、名前しか知らないかった心理学の一分野についても、知識を得られて有益でした。加えて文献が多く紹介されていることは大変好都合でした。

東京都東京女子大学 丸山 晴子

戦後の図書氾濫の傾向にもれず、心理学書も数多くでている。多忙な生活の中でどれを読んでよいか、判らず不安定な気持で一杯だった。このさい最も権威ある編集内容の貴店「心理学講座」に接してたまらなく嬉しい。

愛媛県久万局区内福井町 高橋 大蔵

応用心理学一般にわたって最近の研究を適度な頁数で書かれているのが何よりだ。

われわれのように応用心理を実地に歩んでいた者にとって必読書である。講座大通りもなお一枚くらい増して各学会の動きも記載していただきたい。

和歌山市 心理機能判定員 安田 隆

心理学講座

|| 第六回配本 || 内容

進学適性検査

名古屋大教授 続 有 恒
アメリカの適性検査利用情況 東大教授 沢岡部弥太郎

入学試験の問題 青木孝根
埼玉大教授 山根

教育大教育相談部 青木孝根
文部省中等教育課 大照

心理統計技術

統計処理研究所員 林知己夫

学習実験法 人間 東大助教授
医学博士相良守次

学習実験法 動物 東大助教授
医学博士相良守次

人間における条件反射 文東大助教授
医学博士相良守次

精神異常 東大助教授
信州大教授
医学博士相良守次

精神遅退児 関西学院大教授
医学博士相良守次

教育相談 関立精神衛生研究所員
高木四郎

教育相談 武政太郎

読者カードについて

引をお願いします。
なお郵便切手は不要でございます。

吳市東畑町一八一 信藤 弘

本講座の発刊によって医学と心理学との連携がますます強化されてゆくに違いない事を確信しています。したがつてもづと普及されてよいと思います。完了後全巻の索引をお願いします。

読者名簿を作りたいと存じますし、また出版その他の参考資料にもさせていただきたいと思いますので読者カードに御記入の上、ぜひ御返送下さいますよう切に御願いいたします。